

動物と生活する中で感じたこと

池田 佐和子



安部幼稚園は、横浜市郊外の住宅街の中にあります。幼稚園に入ると広い園庭があり、枕木の階段を登った上の園庭には、ヤギやウサギ、チャボのいる

牧場があります。その奥には「森」と呼んでいる広い雑木林が広がっています。園庭や森には、サクランボやビワ、ミカンなどの果樹や子どもたちの畑があり、四季折々の味覚を楽しむことができます。果実や花々、木の葉の移り変わりなど、自然を身近に感じながら生活しています。

また、ヤギやウサギ、チャボの飼育をしており、毎年の年長組が掃除や散歩、餌やりなどの世話を

「動物係」として行っています。動物係は子どもたちにとって、年長組になったらできる、楽しみであり、憧れとなっています。

この年、私が担任したのは年長組(五歳児)三十一名でした。四月にヤギの出産から新しい命との出会い、二学期にはウサギの看病と死を経験し、動物の命を肌で感じた一年でした。また、動物と接する子どもたちの姿から、優しさや愛情、子どもたちの成長を実感した年でもありました。

そんな、動物と子どもたちのかかわりを、書いてみたいと思います。

子ヤギとの出会い

四月初めに、ヤギのこゆきに赤ちゃんがいることがわかり、年長組になったばかりの子どもたちにそのことを伝えました。小さい組に「静かにしてね」と教えたり、こゆきの大きなおなかを見たりと、こゆきを見守りながら、生活がスタートしました。進級したばかりで緊張気味のYは「こゆき見てくる！赤ちゃん生まれたかな」と、毎日大好きなこゆきの様子を見に行くことを楽しみに登園してきました。

そしてついに四月十九日、二頭の子ヤギが生まれました。ぜひ、生まれたばかりの姿を見せてあげたいと思い、子どもたち一人ずつに小屋の中を見せることにしました。

息を潜めて、そーっとのぞく子どもたち。子ヤギはお母さんの横で丸まっていて、あまりよく見えないうのにもかかわらず、振り返った子どもは目を輝か

せて「いた！」とにんまり。何ともいえないうれしそうな表情をしていたのがとても印象的でした。

子ヤギの名前を決めるときに、「名前は願いを込めてつけるんだよ」と話したことをきっかけに、自分の名前にはどんな願いが込められているのか、家で聞いてくることにしました。

それは、自分を大切に思い、願いを込めて名前をつけてくれた両親や祖父母の温かい気持ちに触れるよい機会となりました。

また、二頭の子ヤギのしぐさや表情、そしていつでも見飽きることもない愛らしさは、自然と子どもを笑顔にし、「かわいいね」と共感し合う、子ども同士の関係も温かく和んだ雰囲気にしてくれたように思います。

何をしていてもかわいいと思える子ヤギとの出会いは、動物のことを大好きになり、大事に思う、とても大切な出会いだったと思います。

ウサギの「もも」との別れ

六月中旬、隣のクラスの子どもが、ウサギのももこの足から血が出ているのを見つけ、以前にも、お世話になったことのある動物病院の先生に診てもらうことにしました。その結果、左後足の二か所に腫瘍ができていて、足を切らないことは長く生きられないとわかりました。「ももこは足に悪いおできみたいなものができて、その足を切らないと長生きできないんだって。どうしたらいいと思う？」と子どもたちに相談すると、「足を切るのかわいそう」「死んじゃうよりも切ったほうがいい」と子どもたちなりに真剣に考えていました。

「足を切ると、三本足になっちゃうんだよね。そうするとどうなるかな？」と問いかけると、Mが両手をつき、片足を浮かせて三本足のウサギになったつもりで動き始めました。その姿に刺激されて、全員

でやってみると「ジャンプできる」「動ける」とわかり、足を切るのはかわいそうだけれど、死んでしまふよりも手術をもらったほうがいいということになりました。

数日後、手術を終えてももこが帰ってきました。「ももこが帰ってきたよ」「門のところにいる」。

帰ってきたことを口々に伝え合いながら迎えに行きました。ケージに入っているももこを囲みながら、「ももこお帰り」「もう大丈夫だよ」「がんばったね」と、ももこに優しい言葉をかけ、温かい雰囲気で見送る子どもたちと、頑張ったももこの姿を見て、私自身思わず胸が熱くなりました。

ところが夏休み中に、傷口に炎症を起こし、ももこは再入院してしまいました。夏休みが明けて、登園した子どもたちが、「ももこがない。どうしたの」と聞いてきました。夏休み中のことを話すために年長組全員を集めると、ももこのことを伝え聞い

て、保育者の話を真剣な表情で待っている子どもたちの姿に私は驚きました。それだけみんなが、**もも**このことを大事に思い、心配しているのだと改めて気づきました。そして、夏休み中に入院をしたことを伝え、**もも**こが病院から帰ってきてからは、ばい菌が入らないようにうんちやおしっこをしたら、すぐにシートを替えるから知らせてほしいと、子どもたちができることを話しました（シート替えなどは衛生面を考え、保育者の手で行っていました）。

そして退院後、**もも**こは年長組保育室前の廊下で様子を見ることにしました。園庭の小屋より身近な場所にいることで、子どもたちはいっそう、**もも**こに気持ちを寄せて生活するようになりました。

「**もも**こ、おはよう」。登園時にさりげなく声をかける子。じつと様子を見つめる子。**もも**こを囲んでおしゃべりをする子たち。おしっこやうんちが出る、すぐに誰かが気づき教えに来ました。また、**も**

もこの好きなキャベツやニンジンの家から持ってきたり、ヨモギやビワの葉が体によいと知り、「**もも**このお薬取ってくる」と言って、友達と誘い合って森に取りに行く子たちもいました。

そんな子どもたちの優しさを受けながら元気にしていた**もも**こが、九月末のある日、ぐったりとして元気がありません。息が荒く、体が傾いている状態でした。子どもたちもその様子に気づき、心配しながら降園しました。病院で診察してもらうと、肺に腫瘍の転移が見つかったのです。

「肺っていう息を吸うところに移っちゃって、もう長く生きられないんだって」と子どもたちに伝えると、「**もも**こかわいそう」「だから苦しそうだったんだね」「自分だったら怖い……」など、それぞれの言葉や表情から、**もも**この気持ちを察しながら受け止めていることが伝わってきました。これからは**もも**こを病院にお願いするか、そばにおくかどちらが

よいか相談すると、**ももこ**もきつと、子どもたちの近くにいるほうがうれしだいろうということで、引き続き子どもたちで、世話をするにしました。

ニンジンに薬をつけてあげたり、スポイトで水を飲ませることになり、**ももこ**の様子を目の前で見るようになってから、「きのうよりニンジン食べないね」「目が少し閉じてる」「きょうは、耳がぴんとしているから元気なのかな」「耳に線（血管）が見える」など、子どもたちは**ももこ**の日々の変化や細かいところにも気がつくようになりました。動物病院の先生から、バナナやナシは栄養があつてよいと教えてもらうと、お母さんに頼んで持つてくる子もいました。**ももこ**が食べやすいようにと、自分でニンジンやナシを切ってくる子どもたちの心遣いに、成長を感じうれしく思いました。

また、「**ももこ**の具合はどうですか」とお母さん方から聞かれることがあり、子どもたちを通してそ

れぞれの家庭でも、**ももこ**のことが話題となり、両親やきょうだいなど、家族を巻き込んで一緒に**ももこ**を心配していたことが伝わってきました。

転移がわかつて一週間後、**ももこ**は亡くなりました。真剣な表情や涙を浮かべている顔。それぞれに**ももこ**をじっと見つめ、子どもたちはお別れをしました。

ももこのお別れは悲しい出来事でしたが、ふとしたときに「**ももこ**、げんきかな」「空でも**ももこ**が遊んでる」と話す子どもたちの中には、大好きな**ももこ**の生活が残っているのだと感ずることができました。幼稚園の思い出を絵に描いたときには、**M**が**ももこ**の絵を描き、「ナシ、あげてるところ。**ももこ**こうれしそうだった」と話してくれました。自分の思いや優しさが動物にも伝わるのだと子どもたちが感じられるかわりをもてたことは、子どもたちにとって、とてもうれしい体験であり、自分と同じ

ように動物にも気持ちがあることを感じられたのではないかと思います。

一年間を通して動物とたくさん触れ合うことを大切に考えて、動物係に取り組んできました。ヤギを森に連れて行ったときには、友達数人と綱を持ってもひきずられてしまうヤギの力強さを感じたり、元氣良くジャンプをしたことに驚いたり、子どもたちは毎回新たな発見や楽しみを見つけていました。

チャボやウサギとのかかわりも、初めは怖くて近寄れなかった子が少しずつ慣れていき、抱っこができるようになる。そのことで、フワフワの抱き心地や温かさを知り、もっと動物のことが好きになっていくのだと感じました。また、うんち掃除など少し嫌なことでも、友達と一緒に頑張れたり、誰かが世話をしなくてはならないことを理解して「大事な動物のために自分たちがやってあげよう」と、責任

をもって取り組む姿が見られるようになっていきました。

新しい命との出会い・死を体験することは日ごろにはないことですが、新しい命の愛らしさや大切な動物とお別れしたときの気持ちや、隣にいる友達や家族と一緒に感じ、動物たち、そして自分たちもたくさんの人に守られて生きているのだと知る貴重な体験になりました。

この体験を通して、自分のことのように真剣に考え、思いやりをもって動物たちとかわれるようになった子どもたちの姿に、改めて身近に動物がいることの大切さを実感しました。これからも、動物のしぐさやかわいさと感じたり、不思議に思う体験や、自分たちが動物の命を守っているのだと感じられるよう、子どもたちの驚きや発見、喜びに寄り添って、身近に動物を感じる生活をしていきたいと思っています。

(安部幼稚園 教諭)